

『小一教育技術』一九六一年八月号（小学館）
 学習オートメーションへの動き 五

おもちゃを与える学習

矢口 新

子どもは歌唱より楽器がすき

学習オートメーションというと、いかにもいかめしい名まえで、いささか気はすかしいが、実際はそれほどむずかしいことをするわけではない。

先日、ある学校で音楽の授業をみた。普通、授業をみるのは、教室のうしろでみるのだが、私は、音楽の授業の時は、前に立ってみることにしている。それは子どもたちの口と目の動きをみるためである。先生がいっしょうけんめいにピアノをひいていて唱歌をうたわせようとしているが、子どもたちの口を見てみると、必ずしもそういっしょうけんめいというわけではない。時々思い出したように口を動かしているのが大ぜいいる。いや、半数ぐらいはそうである。ことに低学年の子どもはそうである。時々大きな口をあけてあくびをする。男の子と女の子のちがいをまざまざと見せつけられるのも音楽の時間である。一般に男の子は、音楽なんかというふんいきがどこかにあるのである。不思議なものである。

しかし、そういう男の子でもリズムをとるため手をうちましようというわけで動作をいれるとめつきり生き生きとして来る。さらに楽器をもたせると、ますますそうである。カスタネットやタンバリンのような単純なものでも、そういうものはいるとまるでちがった様子を示す。どうも見ていて、歌唱指導というのは一番むずかしい仕事であるように思う。考えてみればあたりまえかもしれない。

リズム、メロディー、ハーモニーなどというむずかしいことをいうわけではないが、唱歌というのはやはり総合的なもので、いっきよにそこに行くのはむずかしいのではない。単純な打楽器を使用してリズムの練習からはいるのがよい。二年、三年となってもそうなのではないか。

音楽などというものは、家へもってかえってやる宿題を出すなどということはしない。当然そうあるべきであって、それでよいのだが、しかし、家庭に楽器があつて、それになれ親しんでいる子どもとそうでない子どもとは、やはり相当にそのセンスに異なったものが出て来る。音符を読むなどということも、一種の文字であるから、音符と音をあわせるといふ指導、つまり楽器を使用することが日常行なわれていけば、だんだんなれて来て、なんでもなくなるはずである。そういう意味では、家庭に楽器があるとないとは、ちがって来るわけである。

このように考えると、音楽を学習させるには、子どもに、楽器を与えよということになりそうであるが、それはつまり、子どもがみずからなすことによつて音の世界にはいることなのである。楽器を与えれば自動的に音楽を学習することになる。それはつまり、学習のオートメーション化である。ひとりひとりが自分の楽器ととりくみ、そのペースで勉強し、自分のできる限度において、自己表現をする。その際

に模範となるような演奏があれば、それによって子どもの欠陥を訂正することができる。子どもひとりひとりがこうして自分を表現し、自分を育てるようにしてやるのがよいことではないか。

学習にはお道具があるほう

低学年の子どもは、学習オートメーションという形で学習させることはむずかしいのではないかとされる。あまり形にこだわるとそうなるが、根本は、あらゆる瞬間には何かといつしよけんめいやっているというのである。子どもも一日二十四時間生活しているのであり、ほおっておけば、おとなよりはるかにいつしよけんめいに、瞬間瞬間を暮らしている。おとなのほうがぼんやりして、何をしているかわからないことをしている時間が多いのである。子どもがいつしよけんめいやっているようにすると、それはそれなりに学習しているのである。ラーニング・バイ・ドゥイングということばは、やったことに応じて学習しているということであるが、たしかに子どもはいつしよけんめいやり、それに応じてそれだけのものを獲得しているのである。

ところがこと学習ということになると、とたんにあくびをして、ぼんやりして、しかたがないから、からだだけはどうかやら動かさないでいるが、頭は働かさないでいるようになる。何もしないでぼんやりするということをおぼえるはじまりは、学校生活へはいつてはじめて学習するらしい。

学校生活を九年間もやらせられれば、もうすっかりベテランになって、何かをしているかのごときかっこうをしながら何もしていないのことを、十分身につけてしまうのである。学校とは悪いことを教える

所である。むしろ学校へ行かないで、生地のまま、あの次から次へとエネルギーを出すすさまじい活動性を保持しながら、それで必要なことを学習させることができたらしきことになるのではないか。その障害になっているのは、何といても五十人を一からげにして一線にもって行こうとするのである。そういうこともあってよいけれども、年がら年中、五十人一からげでやらせられるのでは、あの個性にみちた五十人の一、二年生を制約することはできないのではないか。それよりも個別にそれぞれ、おもちゃを与えたらよい。ここでおもちゃというのは、必ずしも、いわゆるおもちゃばかりでなく、学習の用具でもよい。つまり道具を与えるのである。前の音楽でいえば、楽器を与えることなのである。子どもがそれを使って何事かをするようにさせるのである。それに応じて何事かを学習するであろう。五十人の子どもはバリエイティにとんでいるから、おもちゃも一色でなく、さまざまなものがいろいろな音をかかざるようにいろいろな楽器を与えることである。到達する所は一つでも、道はいくつかあるということである。これが個別学習というものではないか。どのおもちゃを使ってもよいから、よりよく使うとこんな音が出るとい模範が、その時に子どもにいつも示されているようになっていけばよい。それが子どもを指導してくれるのではないか。先生は、その配当を次から次へと見回ってやっていけばよいことになる。

計算されたおもちゃを

子どもの興味は二十分とは持続しない。このことは一方からみれば、子どもの興味は実に多方面にそそがれているということである。だんだんそれがわくをはめられて、何に対しても興味をもたなくなるのに

は、学校の教育があずかって力がある。学校を出ておとなになるころには、もう金銭以外のことには興味がなくなるのである。こまったことである。

学校では、子どもがあちらこちらに興味の目をかがやかすのを、それはいけない、あれはいけないと制約してしまう。そうしてドロンとした目で、黒板をにらんでいるようになったら、おとなになったとする。こまったことである。われわれは子どもの興味においつけないけれども、なんとかして、その半分ぐらいはかなえてやるように考えるべきではないか。五十人からの子どもがおり、それが五分ごとに興味の方向をかえて行くのだから、それに応ずるのはなかなかむずかしいが、ただ一つの手は、やはりおもちゃを与えてやることである。そのおもちゃで計算したり、字を書いたり、絵をかいたり、自然をみたりすることができればよいわけではないか。

「サア、こちらを向いて、おとなしくして」というようなことばが、子どもが何かをする世界から、何もしい世界へひきもどしてしまう。先生に同調できる二、三の子どもはよいけれども、多くの子どもは、なんとなく切り切れないままに、ぼんやりしているという習慣の世界へほうりこまれてしまうのである。こうして、毎日毎日、先生に同調できなくて、なすことなく日を送る子どもができて来る。やがてそれにもなれてしまうが、それはほんとうはよくないことである。それは多くの子どもに、自分は学校へ行つて、どうせできないのだという劣等感を養うことになるのである。子どもにおもちゃを与える、そのおもちゃが、あらかじめ計算されたおもちゃだったらもつとよいであろう。それがティーチング・マシンではないだろうか。

(国立教育研究所員)